



た、時間感覚も周囲の明るさの影響を受け、その根本にはセットポイント値の低下が関係すると考察している。体温調節反応だけでなく、胃腸管運動・消化吸収、尿量にも昼間の照度は確実に影響する。Aschoff先生 の一言が私の研究生活を大きく変えたと思っている。さらに、Aschoff 教授はサルの変動リズムに温度が与える研究を薦められた。当時は温度は恒温動物には影響を与えないと信じられていたが、温度サイクルは弱いけれども確実にサルの変動リズムに影響を与えることがわかった。この発見は大変な衝撃であった。その後、温度サイクルはヒトの体温リズムの振幅や位相を変化させることを若村 智子（4月以降、京大助教授、本学会評議員）が証明し、彼女の学位論文になった。これは衣服とリズムの研究に発展した。衣服を着るという事は、皮膚温度を変えることにつながる。温度がリズムに影響する以上、衣服も皮膚温度を介してリズムに影響する可能性もあると考えた。Shin-Jung Park (Sungkyunkwan大学、Seoul) は同じヒトが半袖シャツ・半ズボンを着用するか、長袖シャツ・長ズボンを着用するかにより、夜間前半の尿中のメラトニン分泌量が有意に異なり（半袖・半ズボンが大きい）、睡眠感も半袖シャツ・半ズボンのほうが良い。両衣服条件間で皮膚温度の挙動が大きくことなり、その違いがメラトニンに影響し、ひいて睡眠感を変えたと考察している。この仕事もAschoff教授のサルの変動リズムと温度の研究が最初のヒントになっている。被服とヒトのリズムの研究はまだ緒についたばかりである。それはマスクキングだとの批判の受けた。しかし、なにかあるという思いは消えない。残り少ない人生になってきたが、今後、この分野にエネルギーを注ぎたい。

本間 慶蔵教授とAschoff教授は深い友情に結ばれていたという。二人に共通していえることは、決して弟子を自分の意見で縛らなかった事と思う。しかし、多くの弟子は喜んで先生との共同研究を楽しんだ。私の周囲にもまだ、日本人、韓国人、中国人、ポーランド人の多くの研究仲間がいる。両先生がそうされたように、私もそのような関係で研究仲間との関係をつくり、研究生活を楽しみ生涯をまっとうしたい。色々の意味でお二人は私の研究人生に影響を与えた巨人であった。